新板
上
30

6
673

Moronobu

畧歌仙人伝序

凡倭漢り吟のほくへるこゝろの男神通を
名て五万歌をあらし寿命を多くゆる
あるひは万年あるひは数千年み百数
百年をへて世に伝しかも豊楽にあそびし
仙人数ありといへども人として見るにかたく
も今言ありし其像を何らいはんやせんかんづ
らしく名付る一作の半紙ぞせり偏り異
ね世のかよあらそひしをとる為に従ふりくへり
令のめでさかんなそとて序ス

○太玄女(たいげんぢよ)姓ハ顓(せん)
名ハ和(くわ)わかくして夫(つま)
にをくれて仙術(せんじゆつ)を
ならひ道(みち)をやう
じやうして水に入
もぬるゝことなく
寒の時ひとへ衣を
ちやくすれ共さむからず
も顔色(がんしよく)かはらず
杖(つえ)をもつて石を
さゝげ石ひらけ
て内に入ば門戸(もんこ)
ありて中に金
銀のうつはものみち
しかして後(のち)に天
にのぼりけり

○蔡女仙(さいぢよせん)ハまへ
やうとうの人
なりいとけなき
よりぬいものをよく
まなび時に一ち
父ありてきうせう
一ばいとぬふべし
といふあやう
きうせうとぬひけ
また老父ありて
て蔡女(さいぢよ)に父と
ひきうせうにむ
のりていぼくとも
にとびさりぬ
人みな奇異(きい)の
おもひをなしけり

○武志士ハい
つの所の人とも
しらずとなん
来賓の武禅
山に修行をせ
て神供にあひ
むく時に音布
幕を揺として
行くこと七里市
になりて人々
てあつかひをせり
宋の建炎の初
より白日にむ
かひて天上の
ぼりけり

○子英ハ舒郷
の人なり水
に入て魚をとる
赤き鯉をとり
愛して池にやしな
ふ一年長一丈
あまり角をつけ
さいけり子英
恐と拝む魚の
いはく我なんぢを
むかへに来れり
今日天にのぼれと
たちまち子英
魚にのりてとび
さる後年々来れり
呉中に子英が
祠ありし

○東王公ハ玉女
仙人とむつまじ
くあそぶ東王
口をひらいて
光をはなつ今
の電となり
玉女ハまなこう
そのひかりとお
なじく電神
となれり

○馬師皇ハ黄
帝の時代人なり
馬を治する醫
なり馬の形氣
死生を知て治を
ほどこすなりし
ある時龍おりて
きたりむかひて
耳をたれ口を
ひらく師皇が云
此龍病あり其に
びるの下針をさし
口中に甘草湯
をのましむれバ
則いゆ龍師皇
を負てさりしと云り

○劉晨阮肇二人業として天台山にのぼりくすりをつむとうんで桃をとりてくらひ山下にくだりのかはのほとりにていたりしあるに美女二人ありて劉阮の二人の名をよび家にいざなひけるに合巹とちぎりをむすぶありさまなり経て十日余なり二人いへごひして故郷にかへりみればすでに七世の孫なりけり晋の太康八年のことなりけり

○封衡は隴西の人なり幼かより道をこのむ山に入て薬をとり黄連を服する事五十年なるべしゆへ病なくして竹筒の薬をもつて人の病を治す魏の武帝めして養生の大略をとひ給ふ衡が云思慮を減して嗜欲を去ますのことなりとこたへけるとかや所の養気衛生経数十巻あり

○西王母ハ彼
漢の元封元年
ニ武帝の殿ニ
まいり桃七つを
おくりその三つを
みづからまいり
これをれにおふ
色好み東方さくも
ひのかりぬすみて
かへりけるとぞ
まことそのよふや
えぐこ孫とても
よりて此もとの
也

○徐鸞ハ海塩
の人一日白衣
の人来り門より
入鸞杖を一ッ
叱しければたちま
ち白亀となる
後石崎山より
上りて仙となる
兄弟往て元
とふねを鸞
山上の木まで
うつしぶれ
おりてみれバ
鸞ガかくれたり
ただりけり

○王子喬ハ周の霊王乃太子晋なりよく笙を吹て鳳鳴をなす道人浮丘公と晋とを嵩山にのぼり三十余年ありて出て云七月七日我を待べしとて後白き鶴にのりて山頭にあらはる後その下に祠を立つといへり

○玄解ハいづれのところの人といふことをしらず唐の憲宗の時みかど玄解にとひ給ふ先生既に不老なりや玄解がいはく海上に霊草ありとて芝をたてまつる一名雙麟芝二に六合葵三に八萬根藤となづくみかど是を食し給ひて玄解黄馬にのりて海上をさりしといへり

○太真王夫人ハ
西王母のむすめ
玉卮なり一絃
の琴をこのむ
時ハ百のけだ
ものあつまり来
まへにくしと
まもらしく
てそのゝち王
夫人ハ白き
龍にのりて
四海に
おもむきけり

○赤松子ハ神
農の時の雨
の師なり氷を
服して神農に
おしゆよく火に
入てもやけず
つねに西王母の
石室の中に居
て風雨にしたがひ
やくきゆうを
ゆるりとし
人呂界へゆく
あそびたりとそ

○李少君あざな
ハ雲翼斉國の人
さの人なり道を
このんで山に入く
薬をとる安期生
とて仙人にあひて
神楼散といふ薬
を授く仙術に通
じ前漢の武帝
まつりへ郊祀の祭を
おこなふ後武帝の
夢に天帝少君
とらへて往
るゝ死を大葬せ
し衣棺ひらきを
御らしてかへらの
失ありきなり